



指導と評価の一体化

学校は失敗するところ！ 教室は間違えるところ！ 授業は子供が主人公！ 誰一人取り残さない！
子供の成長を教育活動のど真ん中におく！ One for all. All for one. ONE TEAM. チーム拝二小

I 基本的な考え方

1 学習評価の充実

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業評価を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価することを示し、授業の改善と評価の改善を両輪として行っていく。

2 カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹に当たり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質的向上のために、PDCAサイクル化を図る中核的役割を担っている。

3 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価

指導と評価の一体化の観点から、新学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」を実現して授業改善を図り、各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っている。

4 学習評価の改善の基本的な方向性

「1」～「3」の課題解決及び指導と評価の一体化を図り、学習評価が真に意味のあるものとする。(1) 児童の学習改善につながるものにしていくこと。(2) 教師の指導改善につながるものにしていくこと。(3) これまで慣行として行われてきたことでも必要性・妥当性が認められないものは見直すこと。

II 評価の観点 (内容)

【主体的に学習に取り組む態度】

- 単に、継続的な行動や積極的な発言をするなど、性格や行動面の傾向（挙手の回数やノートの取り方、宿題の有無）などの形式的な活動を評価するのではない。
- 知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかという意思的な側面を評価する。
- ◎ 評価の側面として、①知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組みをしようとする、②「①」の取り組みの中で自らの学習を調整しようとするの二つの側面を評価する。
- ◇ ノートやレポートの記述、授業中の発言、教員による行動観察、児童の自己評価・相互評価などを用いる。

セルフ・モニタリング：何を理解し、何ができるようになったのか！
セルフ・コントロール：今後の対策について考え実行する。

【知識・技能】

- ① 各教科の学習過程の中で、個別の知識・技能の習得状況について評価する。
- ② それら（習得した知識・技能）を既存の知識と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活場面で活用できる程度に概念を理解したり、技能を習得したりできているかを評価する。
- ◇ 事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮したペーパーテストの工夫改善を図る。
- ◇ 評価場面では、児童・生徒が文章で説明したり、教科の特質に応じて観察・実験したり、式やグラフで表現したりする場面を設けるなど、多様な方法を取り入れて評価する。

【思考・判断・表現】

- 各教科の知識・技能を活用して課題を解決するために（過程）、必要な思考力、判断力、表現力を身に付けているかを評価する。
- ◇ ペーパーテストだけでなく、論述やレポート作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現などの多様な活動を取り入れたりと、それを集めたポートフォリオを活用したりする。